

ヨーロッパとは何かーアイデンティティ形成の過程ー

—Europe in History: the making of European Identity—

森 貴子（西洋史）

1. 講義の概要

2020年度後期・水曜日2限開講の外国史2は、三回生以上を対象に、上記タイトルで開講された。学期末レポート提出者は17名（初等教育コース小学校サブコース3回生11名、中等教育コース社会科教育3回生4名、4回生2名）であった。

(1) 講義の目的

本講義は、ヨーロッパやネーションといった集団が、そのアイデンティティも含めて歴史的に構築されたものであるとの認識に至ることを目標としている。

この目標を達成するために、「ヨーロッパとは何か」という問いを設定した。その空間としてのまとまりは如何にして形成され、また如何なる歴史的な性格を持つのか。本講義では、こうしたヨーロッパ意識の形成過程を、いくつかの具体的事例を取り上げつつ長期的視点から検討した。そしてそこから、地域的アイデンティティの複層性や変容、アイデンティティ形成における歴史の役割、そして「他者」の重要性などを明らかにした。

こうした認識を得ることは、ひいては、近代国民国家の成立以来我々を強烈に縛り付けてきた「ネーション」の相対化に繋がると同時に、紛争をはじめとした現代世界の諸問題を考える際の、糸口にもなると考えている。

(2) 講義の詳細

授業は12月までは対面での講義形式で実施できたが、1月以降は新型コロナウイルス感染症対策として、遠隔授業（非同期型）とせざるを得なくなった。そのような状況下でも映像資料を可能な限り視聴してもらうなどして、アイデンティティの形成という抽象的なテーマを、学生ができるだけ身近に具体的に考察できるように工夫した。まずはなぜトルコはEUに入れないのか、トルコを拒む「ヨーロッパ」

とは何なのか、EUを脱退したイギリスの「ヨーロッパ」での位置付けはいかなるものか、などの問いかけをしたうえで、①古代ギリシアにおけるオリエンタリズム文化の受容と近代ヨーロッパにおけるその否定（古代ギリシアの理想化）、②中世におけるヨーロッパ意識の勃興とその内容、③ヨーロッパ各地域におけるゲルマン的要素とローマ的要素の併存、④キリスト教（カトリック）＝ヨーロッパの形成におけるギリシア正教の役割、⑤「他者」としてのビザンツ帝国、オスマン朝、⑥地域紙幣（イングランド銀行発行紙幣に対するスコットランドとアイルランドの立場）とアイデンティティ、といった内容を扱った。

2. 授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした。ただしアンケートの提出については、匿名性の保証のために一斉に箱に入れるなどの形をとっていた例年とは異なって、最終レポート提出と同時にメールに添付してもらうことにした。そのため学生にとっては、回答者が特定されてしまう懸念もあったと推察されるが、決して成績評価には影響しないことなど、事前に必要と思われる説明を加えておいた。

回答者は小学校サブコース三回生5名、中等社会科三回生2名、4回生2名、所属不明1名であった（計10名）。レポート提出時にアンケートを添付していない者が7名いたが、再度協力を依頼することはしなかった。

問1～6は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

<評価基準>

- 5：強くそう思う（非常に良い）
- 4：ややそう思う（良い）
- 3：どちらとも言えない（普通）

2：あまりそう思わない（あまり良くない）

1：全くそう思わない（良くない）

<問い>

問1：この授業への出席状況は

問2：授業のテーマ・目的は、明確でしたか

問3：担当教員の説明は分かりやすかったですか

問4：配付資料・映像資料は有用でしたか

問5：授業の内容、レベルはあなたにとって適切でしたか

問6：授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	5	5	0	0	0
問2	9	1	0	0	0
問3	8	1	1	0	0
問4	7	3	0	0	0
問5	4	2	2	2	0
問6	7	3	0	0	0

<各問に対するコメント>

問4：個人的に、ギリシャにおける“白”とローマ帝国についての映像資料が興味深かった。後半、あまり映像資料がなかったのが残念だった。

問5：世界史を習っていないので難しかった

問7～9は記述式で回答を求めた。

問7 この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

●高校の時に世界史を選択していなくても説明が充実していて分かりやすかった。授業で使われたビデオが面白い内容で印象に残った

●映像がとても印象に残っています。ビデオがあることでより理解しやすかったです

●映像資料も用いて授業を進められていたこと

●対面で授業を行った点。レジュメ等ではなく、全て自分でノートを取るスタイル。講義内容を整理しやすかった

●ギリシャに対するヨーロッパが行った理想化に、未だに自分も影響を受けていたこと。アイデンティティについて考える良い機会に

なった

●ヨーロッパの人たちが白い文明にこだわるあまり、彫刻を削っていたこと

●世界史は高校生の時に履修していたが、アイデンティティに着目して世界史を学習したことがなかったので印象的だったし、とても興味深かった。他の地域でも同様な考察を行なっていきたいと思った

●自分は世界史について、浅い知識しか持っていなかったため、ヨーロッパの形成について深く知ることができてよかった

問8 この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

先生が一方的に喋り続けるのはどうかと思う
／映像資料をもっと増やすべき

問9 アンデンティティをテーマとしたこの授業を受講して、ヨーロッパや日本という国の特質、ひいては我々の生きる現代世界の諸問題について、考えることができましたか。

●EUの加盟問題など、今の時代だけでは分からない根深い問題だと感じ、現代を理解するには歴史を学ぶのも大切だと思った。

●ヨーロッパ史を振り返り、その中でアイデンティティに注目することで現代の社会問題について深く追求することができた

●ヨーロッパアイデンティティについて学習すると、役割や問題点がよく見えて、それは現代の社会でも課題になると思った

●ヨーロッパはその形成過程からアイデンティティの複層性に富んでいたが、日本は島国ということもあり、複層性に欠けるところがあると考えた。もし日本人が強く持っているアイデンティティが揺らぐことがあれば、何が日本の形を保つのかと不安になった

●アイデンティティを大切にと言われる時代であるが、いまいちこれという自己のアイデンティティを理解していなかったが、これだといけないうことはなく、もっと柔軟に捉えていいのだと思えた。国際平和等を考える上でも、アイデンティティの問題を念頭におくと見えるものも変わってくると考えた

●ナショナル・アイデンティティがあり、正しい持ち方ができていないから偏見や差別、

紛争など、国境を超えて争うようなことになっているのではないだろうかと思う

●LGBTなどのセクシュアリティの問題はアイデンティティの問題とも関連があるのではないかと思う。それぞれのアイデンティティを受け入れる心・意識を育てていくことが教育における重要な取り組みではないかと感じた

●世界の国々の人たちが様々な事情や歴史を持っていることはともかく、その認識が人によって違うことが問題なのだと思う

●アイデンティティとは何なのか、改めて考えさせられた

●授業内で考えることはありましたが、他の場面では特にありませんでした

3. アンケートに対するコメント

今年度は、前期については遠隔で授業を実施せざるを得ず、そのために様々な弊害が生じた。特に報告者の授業では、例年は様々な映像資料を活用していたのに、著作権の問題でそれが不可能となったことの影響が大きかった。しかし後期になって、外国史2については12月までは対面で授業をすることができたため、その間できるだけ多くの視覚資料を提供しつつ進めることができた。その成果はアンケートの問7に対する受講生のコメントから明らかである。例えばNHK制作の大英博物館に関する「古代ギリシャ “白い”文明の真実」、また「ポンペイ・帝国繁栄の光と影」は、古代ギリシャとローマについての我々のイメージを明確にするために有益であった。特に前者は、古代ギリシャの真実が近代になって隠蔽されたスキャンダルをテーマとしており（所謂エルギン・マーブル洗浄事件）、アイデンティティの操作性について考えさせる非常に良い教材と言える（受講生にも強い印象を与えた様子である）。他方で、本授業の理解に貢献しうる資料の選定には困難もあり、テーマによっては映像を準備できないものもある。が、問4および問8にコメントしてくれた受講生の期待に添えるよう、教材の探求にも努力していきたいと思っている。

授業の具体的な内容については、問5への回答の分布およびコメントから、やや難しいと感じた受講生がいたことは間違いない。他方で、問7では正反対のコメントを寄せてくれた受講生もいて、なかなか対応に迷うところ

である。前もって知っておいて欲しい事柄や知識について明確にアナウンスするなど、予習を促すと同時に、それを実質化する方途を試してみる必要がある（今期も行ったところではあるが・・・）。

本授業のテーマであるヨーロッパ・アイデンティティの歴史的形成過程、そしてその特質に関する受講生の考察（その深まり）のあり様は、問9のコメントから推測することが出来る。アイデンティティというものが固定されたものではなく、人や時代によって異なっていること、従ってアイデンティティを問題にする際には歴史的考察（「事実」とメタレベルの両方で）が必要となること、そして認識における相違を柔軟に受け止めていくべきであること・・・。表現は異なるものの、こうした点について受講生それぞれが考えを巡らせたことを読み取ることができよう。ヨーロッパと比較した場合の日本の特質を指摘している回答もあり、この記述自体は様々な問題を含んでいるが、少なくとも自分に身近なテーマとして受け止めていることは間違いない。不安を恐れず、ここを出発点として、アイデンティティというテーマ（それは自分の内にある包摂と排除をめぐる問題でもある）に向き合ってもらいたい。本授業では今後も、歴史との関わり方の具体的実践の一つとして、アイデンティティの歴史的構築過程とその変容を扱っていく予定であるが、そのために学生の思考を深めるような問題提起の仕方、授業内容、そして資料の準備を工夫していきたいと考えている。